



あいとうエコブラザ菜の花館(後方)近くの菜の花畑で=東近江市

菜の花を軸に地域の中で食とエネルギーと元気が循環する「菜の花プロジェクト」。持続可能な社会に向けた滋賀発のこの取り組みが、各地に広がり、「全国菜の花サミット」が開かれるようになって20周年となる。今では全都道府県で百数十グループが動き、東日本大震災の被災地へ、中国や韓国など海外へと広がり続けている。地球温暖化の影響がまったなしとなり、食やエネルギーの課題が山積みとなる中、NPO法人菜の花プロジェクトネットワーク代表の藤井絢子さんは「偉い人任せにせず、日々の暮らしを大切にすることから始めましょう」と話す。藤井さんにこれまでの歩みと「未来の醸し方」のヒントを伺った。

#### ふじい・あやこ

- 1946年 神奈川県に生まれる
- 1969年 上智大学4年生のとき、石牟礼道子の『苦海浄土』（同年発行）に出会う。
- 1971年 夫の転勤で守山市へ。食の安全を求めて地域生協づくりにかかわる。
- 1972年 湖南生協誕生。
- 1977年 湖南生協総代会で合成洗剤をやめ、粉せっけん利用推進決議。9日後、琵琶湖に大規模赤潮発生。せっけん運動が全県に広がる。
- 1980年 琵琶湖富栄養化防止条例施行
- 1983年 琵琶湖にアオコ発生。湖南生協で環境の取組強まる。
- 1984年 ドイツ訪問。以来、訪独を重ね、環境への取組調査。
- 1990年 日本初の環境専門生協「滋賀県環境生活協同組合」誕生。理事長に。
- 1998年 旧愛東町で「愛東イエロー菜の花エコプロジェクト」スタート。
- 2001年 旧新旭町で第一回「菜の花サミット」。27都県から500人参加「菜の花プロジェクトネットワーク」設立
- 2011年 東日本大震災。菜の花プロジェクト、南相馬市などに広がる。

環境省中央環境審議会委員などを歴任。著書に『菜の花エコ革命』（創森社）など。緑化推進内閣総理大臣表彰（2018年）など多数受賞。

水俣から琵琶湖、世界へ。命と知恵巡る

湖<sup>うみ</sup>と生<sup>なま</sup>きたる 藤井 絢子<sup>あやこ</sup>さん  
菜の花プロジェクトネットワーク代表

● インタビュー

聞き手・三宅 貴江  
写 真・中村 憲一



「苦海浄土」とチツソの株券

—環境に関心を持った原点は？

**藤井** 水俣病です。大学4年生のときに石牟礼道子さんの『苦海浄土』に出会いました。当時は大学闘争、70年安保闘争、ベトナム戦争反対など、日本は「政治の季節」。どう生きるのか、たくさん本を読み、議論する中で手にしたのが石牟礼さんの本でした。私は横浜で育ち、東京の大学に通っていました。高度成長期で豊かになっていった日本で、どんなことが起きているのかを知りたいと、チツソの株券を購入して、株主総会にも足を運びました。

大学卒業後、結婚相手の転勤で住むことに

なつたのが守山市。チツソの化学繊維工場がありました。なんとという因縁。ちょうどチツソ労組の組合員が、食や地域とのつながりを大切にしたいと生協（湖南生協Ⅱ1972年設立）をつくろうとしていました。迷わず、準備段階からかかわりました。

琵琶湖とともにある滋賀県は、食にこだわり、水を大切にしてきた歴史があります。水俣の二の舞にはいけないという思いで参加したのです。その生協活動のリーダーが細谷卓爾さん（※チツソ労組出身。滋賀地評事務局長、湖南生協理事長を歴任。武村正義知事誕生の原

動力）です。

—大きな出会いですね。

**藤井** ええ。リーダーの先見性はとても大きい。琵琶湖での大規模な赤潮発生（77年）を機に、「せっけん運動」が全県に広がり、琵琶湖富栄養化防止条例（80年施行）につながったのも、細谷さんの先見性と、武村知事（当時）の存在があったからです。

湖南生協の仲間たちは以前から、合成洗剤を使うと手が荒れ、オムツかぶれが起きることに気づいていました。廃食油から作る粉せっけんなら環境負荷が減り、しかも洗浄能力も高いことを確認して、合成洗剤をやめ粉せっけんを利用・推進すると湖南生協総代会で決議をしたのが77年5月。赤潮の大発生は、その9日後です。代替案をもっていたから、せっけん運動は全県に広がった。

—試験のたびに活動は次々と発展しましたね。

**藤井** せっけん使用率は一気に7割に達しましたが、無リン合成洗剤が出たとたん、すとんと落ちました。リン主因説だったからです。でも、琵琶湖では83年にアオコが発生、汚染はより深刻になった。原因は何か、川を遡って追いました。わかったのは、トイレ水洗浄の要望が高まる中、し尿だけを処理する単独浄化槽





菜の花館のプラント前で、若い仲間たちと

生協活動の言葉の違いです。若いお母さんにも、だれにでも届く言葉と活動と思いました。

たとえば、「菜の花プロジェクト」のモデル地区・旧愛東町(東近江市)では、身近な食材を活かすレシピづくりを続けて、料理冊子シリーズを発行しました。食とエネルギーのカギは地域にあることを実感してもらおう試みです。作って食べて楽しみながら、どこから来たのか、どれくらい輸送にエネルギーが使われたかわからない食材でなく、地元の食材でこういう暮らしをすることが温暖化防止になるし、心地いいと気付く。

また、プロジェクトの拠点「菜の花館」では、菜種油やせっけん、BDFを作っている以外に、十分に利用されていなかったお米の粉殻を炭にしています。田畑に入れると、ふかふか元気な土になります。食べて安心という観点から長く取り組んできましたが、2018年のIPCC(気候変動に関する政府間パネル)特別報告書で、バイオ炭で土壌に炭素を貯留する効果の言及が入り、注目され始めています。価値が後からついてくるおもしろさがあります。

——子育てをされながら多方面の活動、大変だったのでは。

藤井 言葉も食べ物も環境も全部いのちにかかわるので、私の中ではいっしょです。分野は違ってもひとつです。家中、散らかり放題でし

たが。

水俣で患者認定を巡ってなお続く裁判、原発事故のあと福島の子どもたちが置かれている状況、福井の原発、そして琵琶湖。全部、つながっています。いのちの問題として問い直さないといけない。

——若い世代へ伝えたいことは?

藤井 学ばないと何も育ちません。出会いを大切に、しっかり学んでネットワークをつくっていつてほしい。学びと実践を通した引き出しをたくさん持つことがとても大切。引き出しが増えれば、出会った相手の胸にしっかりと届く話ができる。その積み重ねです。

今年12月、栃木県小山市で20回目の「全国菜の花サミット」を開きます。テーマは「持続可能な田園環境都市を目指して」。ひとつの集大成にしたい。

これまでの仕事はひとつひとつ若い世代を育て、手渡してきています。私はほかに、やりたいことだらけ。たとえば、今、滋賀には108カ国・地域のルーツの人たちが暮らしています。地元にながら国際交流ができる時代です。にもかかわらず、ほとんど交流が見られない。食文化で、音楽でつながっていきたい。学びに困難がある子ども・家族がいれば支えたい。どんな出会いがあるか、わくわくしてきませんか?